

東欧行政視察記

へその一

徹底した質素儉約



横芝町長

佐瀬哲司

県内市町村長による東欧州五か国への行政視察（県町村会主催）が五月上旬に実施され、五月晴れの空を悠然と舞う鯉のぼりの勇姿を後に、私も十日余り東欧州のいくつかの都市を視察する機会を得ましたので、これから数回にわたり、私なりに感じた諸外国の状況を記してみようことにしました。

しかし、ほんの数日間見た程度のもの、拙文であり、群盲象を撫ずるのそしりをまぬがれぬやも知れませんが、見聞したところを辛直に記述するように心掛ける心算であります。

第一次の視察団十二名は、五月七日の午前八時半、成田空港へ集合し、所定の手続きを終え、特別待合室にて結団式。団長を今井長南町長に、また副団長を嘉瀬山武町長にお願いし、ヒールで乾杯、なごやか裡に結団式を終えた。

各町村からのお見送りの中を、日本航空JAL四四七便（DC8百四十人乗）に搭乗、午前十一時五分離陸し、一路モスクワ経由で、西ドイツのフランクフルトへ向かう。

出発時の成田空港は、小雨模様のため、離陸直後は雲海の中で視界ゼロであったが、日光中

りて、シベリアの都市の片鱗さえも見えず、残雪や川面の氷が寒々しく目にうつるばかりで、北極に近い無人地帯のコースを許可しているように思われた。

午後七時頃に夕食が出た。丁度、成田を発ってから八時間を経過しており、日本は夕飯の時間だが、ソ連上空は時差が五時間ということとで真昼間（現地時間午後三時）であった。

モスクワの近くにきたのか、山林や市街地が見られるようになった。成田から九時間四十分、モスクワのセレネス空港に着陸した。

この空港の周辺は、白樺の森林地帯であり、小麦畑も青々として日本の気候よりは一月ぐらいい遅いような感じがした。

終戦後、私はこのソ連で二年程抑留生活を送っていたが、その収容所がモスクワの東南六百\*のカザンという都市に近い所だったので、当時のことが思い出され、いささか感慨深いものがあつた。

共産圏の縮図

セレネス空港

この飛行場の建物は、新しく立て派に見えた。

モスクワには三つの飛行場があるが、この飛行場はモスクワオリンピックのために急ピッチで改造したとのこと、外見は立派な



【無駄なものはなく、最小限度の設備で徹底して節約しているモスクワのセレネス空港。売店の電灯はついているが、手前のロビーの電灯は消してある】

のだったが、内容的にはいかにも共産圏らしく、無駄なものはいくつといていいほどなく、最小限度の設備で徹底して節約している姿勢がうかがえ、これから私達が訪問する東ドイツやブルガリアなど共産圏の国で経験する総てを、この空港で感じとった。

ロビーや便所などには、電灯の器具はあっても、昼間は一切消してあり、最低限度必要なさざあればよいという観念のようだ。

便所の手洗い場などにも、使い古しの小さな石けんが二、三個あるのみで、成田空港のようなぜいたくな設備は一切なく、トイレレットペーパーもあらかじめハガキ大に切っており、紙質も日本の新聞紙よりも粗悪で、その徹底ぶりに

日本の

ぜいたくさを痛感

驚嘆させられたり、わが国のぜいたくさを痛く反省させられたり複雑な印象を受けた。

飛行場に駐車していた四、五台ぐらいの貨物自動車も、さびの出た相当に古いもので、これが米國と並んで宇宙開発競争をする大國ソ連の姿かと疑うほどであった。

わが国を始め、世界各國に木材を輸出している一大資源國であるこの國のトイレレットペーパー一つを比較しても、日本はこれだけのだろうかという心配が、私の脳裏を強烈に去来した。